トロッコ

芥川龍之介

小田原熱海（あたみ）間に、軽便鉄道敷設（ふせつ）の工事が始まったのは、良平（りょうへい）の八つの年だった。良平は毎日村外（はず）れへ、その工事を見物に行った。工事を――といったところが、唯（ただ）トロッコで土を運搬する――それが面白さに見に行ったのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後（うしろ）に佇（たたず）んでいる。トロッコは山を下（くだ）るのだから、人手を借りずに走って来る。煽（あお）るように車台が動いたり、土工の袢天（はんてん）の裾（すそ）がひらついたり、細い線路がしなったり――良平はそんなけしきを眺（なが）めながら、土工になりたいと思う事がある。せめては一度でも土工と一しょに、ト

ロッコへ乗りたいと思う事もある。トロッコは村外れの平地へ来ると、自然と其処に止まってしまう。と同時に土工たちは、身軽にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終点へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと来た山の方へ登り始める。良平はその時乗れないまでも、押す事さえ出来たらと思うのである。

或夕方、――それは二月の初旬だった。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行った。トロッコは泥だらけになったまま、薄明るい中に並んでいる。が、その外は何処を

見ても、土工たちの姿は見えなかった。三人の子供は恐る恐る、一番端（はし）にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃（そろ）うと、突然ごろりと車輪をまわした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかった。ごろり、ごろり、――トロッコはそう云う音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登って行った。

その内にかれこれ十間（けん）程来ると、線路の勾配（こうばい）が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなった。どうかすれば車と一しょに、押し戻されそうにもなる事がある。良平はもう好（よ）いと思っ

たから、年下の二人に合図をした。

「さあ、乗ろう！」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乗った。トロッコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき当りの風景は、忽ち両側へ分かれるように、ずんずん目の前へ展開して来る。顔に当る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動揺、――良平は殆ど有頂天になった。

しかしトロッコは二三分の後、もうもとの終点に止まっていた。

「さあ、もう一度押すじゃあ」

良平は年下の二人と一しょに、又トロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後（うしろ）には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思うと、急にこう云う怒鳴り声に変った。

「この野郎！　誰に断（ことわ）ってトロに触（さわ）った？」

其処には古い印袢天（しるしばんてん）に、季節外れの麦藁帽（むぎわらぼう）をかぶった、背の高い土工が佇んでいる。――そう云う姿が目にはいった時、良平は年下の二人と一しょに、もう五六間逃げ出していた。――それぎり良平は使の帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗って

見ようと思った事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何処かに、はっきりした記憶を残している。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色の麦藁帽、――しかしその記憶さえも、年毎に色彩は薄れるらしい。

　その後十日余りたってから、良平は又たった一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼等を見た時から、何

だか親しみ易（やす）いような気がした。「この人たちならば叱（しか）られない」――彼はそう思いながら、トロッコの側（そば）へ駈（か）けて行った。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、――縞（しま）のシャツを着ている男は、俯向（うつむ）きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してく**よう**」

良平は二人の間にはいると、力一杯押し始めた。

「**われ**は中中（なかなか）力があるな」

他（た）の一人、――耳に巻煙草（まきたばこ）を挟（はさ）んだ男も、こう良平

を褒（ほ）めてくれた。

その内に線路の勾配は、だんだん楽になり始めた。「もう押さなくとも好（よ）い」——良平は今にも云われるかと内心気がかりでならなかった。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、黙黙と車を押し続けていた。良平はとうとうこらえ切れずに、怯（お）ず怯（お）ずこんな事を尋ねて見た。

「何時（いつ）までも押していて好（い）い？」

「好いとも」

二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ」と思った。

五六町余り押し続けたら、線路はもう一度急勾配になった。其処には両側の蜜柑畑（みかんばたけ）に、黄色い実がいくつも日を受けている。

「登り路（みち）の方が好い、何時（いつ）までも押させてくれるから」――良平はそんな事を考えながら、全身でトロッコを押すようにした。

蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下（くだ）りになった。縞のシャツを着ている男は、良平に「やい、乗れ」と云った。良平は直（すぐ）に飛び乗った。トロッコは三人が乗り移ると同時に、蜜柑畑の匂（におい）を煽（あお）りながら、ひた辷（すべ）りに線路を走り出した。「押すよりも乗る方がずっと

好い」――良平は羽織に風を孕ませながら、当り前の事を考えた。「行きに押す所が多ければ、帰りに又乗る所が多い」――そうもまた考えたりした。

竹藪のある所へ来ると、トロッコは静かに走るのを止めた。三人は又前のように、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雑木林になった。爪先上りの所所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまっている場所もあった。その路をやっと登り切ったら、今度は高い崖の向うに、広広と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、余り遠く来過ぎた事が、急にはっきりと感じられた。

三人は又トロッコへ乗った。車は海を右にしながら、雑木の枝の下を走って行った。しかし良平はさっきのように、面白い気もちにはなれなかった。「もう帰ってくれれば好(い)い」――彼はそうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も帰れない事は、勿論(もちろん)彼にもわかり切っていた。

その次に車の止まったのは、切崩(きりくず)した山を背負っている、藁屋根の茶店の前だった。二人の土工はその店へはいると、乳呑児(ちのみご)をおぶった上(かみ)さんを相手に、悠悠(ゆうゆう)と茶などを飲み始めた。良平は独(ひと)りいらいらしながら、トロッコのまわりをまわって見た。トロッコには

頑丈（がんじょう）な車台の板に、跳（は）ねかえった泥が乾（かわ）いていた。

少時（しばらく）の後（のち）茶店を出て来しなに、巻煙草を耳に挟（はさ）んだ男は、（その時はもう挟んでいなかったが）トロッコの側にいる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有（ありがと）う」と云った。が、直（すぐ）に冷淡にしては、相手にすまないと思い直した。彼はその冷淡さを取り繕うように、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあったらしい、石油の匂がしみついていた。

三人はトロッコを押しながら緩（ゆる）い傾斜を登って行った。良平は車に手をかけていても、心は外（ほか）の事を考えていた。

その坂を向うへ下(お)り切ると、又同じような茶店があった。土工たちがその中へはいった後(あと)、良平はトロッコに腰をかけながら、帰る事ばかり気にしていた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかっている。「もう日が暮れる」——彼はそう考えると、ぼんやり腰かけてもいられなかった。トロッコの車輪を蹴(け)って見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、——そんな事に気もちを紛らせていた。

ところが土工たちは出て来ると、車の上の枕木(まくらぎ)に手をかけながら、無造作(むぞうさ)に彼にこう云った。

「われはもう帰んな。おれたちは今日は向う泊りだから」

「あんまり帰りが遅くなるとわれの家でも心配するずら」

良平は一瞬間呆気にとられた。もうかれこれ暗くなる事、去年の暮母と岩村まで来たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたった一人、歩いて帰らなければならない事、――そう云う事が一時にわかったのである。良平は殆ど泣きそうになった。が、泣いても仕方がないと思った。泣いている場合ではないとも思った。彼は若い二人の土工に、取って附けたよ

うな御時宜をすると、どんどん線路伝いに走り出した。良平は少時無我夢中に線路の側を走り続けた。その内に懐の菓子包みが、邪魔になる事に気がついたから、それを路側へ抛り出す次手に、板草履も其処へ脱ぎ捨ててしまった。すると薄い足袋の裏へじかに小石が食いこんだが、足だけは遥かに軽くなった。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登った。時時涙がこみ上げて来ると、自然に顔が歪んで来る。――それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴った。

竹藪の側を駈け抜けると、夕焼けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかっていた。良平は、愈気

が気でなかった。往きと返りと変るせいか、景色の違うのも不安だった。すると今度は着物までも、汗の濡れ通ったのが気になったから、やはり必死に駈け続けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ来る頃には、あたりは暗くなる一方だった。

「命さえ助かれば――」良平はそう思いながら、辷ってもつまずいても走って行った。

やっと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思いに泣きたくなった。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け続けた。

彼の村へはいって見ると、もう両側の家家には、電

燈の光がさし合っていた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯気（ゆげ）の立つのが、彼自身にもはっきりわかった。井戸端に水を汲（く）んでいる女衆（おんなしゅう）や、畑から帰って来る男衆（おとこしゅう）は、良平が喘（あえ）ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと声をかけた。が、彼は無言のまま、雑貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家（うち）の門口（かどぐち）へ駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。その泣き声は彼の周囲（まわり）へ、一時に父や母を集まらせた。殊（こと）に母は何とか云いながら、良平の体を抱（かか）えるようにした。が、良平は手足をもがきながら、啜（すす）り上げ啜り上げ泣

き続けた。その声が余り激しかったせいか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集って来た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く訣（わけ）を尋ねた。しかし彼は何と云われても泣き立てるより外に仕方がなかった。あの遠い路を駈け通して来た、今までの心細さをふり返ると、いくら大声に泣き続けても、足りない気もちに迫られながら、…………

良平は二十六の年、妻子（さいし）と一しょに東京へ出て来た。今では或雑誌社の二階に、校正の朱筆（しゅふで）を握っている。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思い出す事がある。全然何の理由もないの

に？――塵労（じんろう）に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すじ断続している。…………

底本：「蜘蛛の糸・杜子春」新潮文庫、新潮社
１９６８（昭和43）年11月15日発行
１９８４（昭和59）年12月25日38刷改版
１９８９（平成元）年５月30日46刷
入力：蔣龍
校正：鈴木厚司
２００４年10月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。